

ポーランドの古都・クラクフに吹く風

—「アウシュヴィッツ」見聞録(1)—

牧 彰

2012年12月14日、早朝から宿を出発して、クラクフの歴史地区（世界遺産）観光へ繰り出す。先ずは、11世紀中頃～17世紀にかけて歴代ポーランド王の居城だったヴァヴェル城を表敬訪問する。中世の佇まいを留めるヴァヴェル城は、旧市街南のヴィスワ川が大きく屈曲する丘上に慎ましやかに建っている。

城郭へ至る途中の展望台から、「日本美術・技術センター“マンガ”館（1994年開館）」が間近に俯瞰できる。此処は、日本美術収集家故フェリックス・マンガ・ヤシェンス氏蒐集の7,000点にも及ぶ日本美術（主に浮世絵）の殿堂。“マンガ”とは、ヤシェンス氏のペンネーム兼ミドルネームであり、「北斎漫画」に由来する。波状にうねった屋根の美術館（磯崎新設計）は中世の町並みにほどよく馴染んでいて、日波両国文化交流を健気に果たしている。地球の裏側の異国の地で、邦人設計の美術館に出会うとは！些か恥ずかく想うこと頻り。

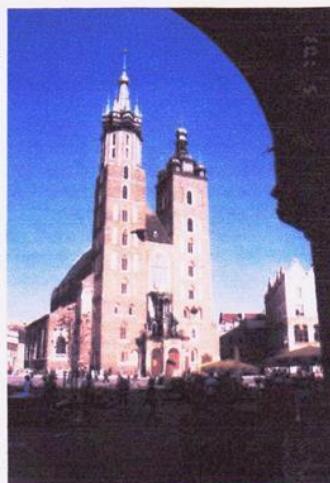
城門を潜ると、左側にゴシック・ルネサンス・バロックなどの建築様式が混在する大聖堂があり、ワルシャワ遷都前は、此處で歴代ポーランド王の戴冠式が行われたとのこと。ルネサンス様式の金色丸屋根の礼拝堂が、形状・色彩共に際立っている。大聖堂内部の観光は予定外なのは、誠に残念の極み！大聖堂沿いに奥へ進むとヴァヴェル城旧王宮があり、ゴシック様式・ルネサンス様式の建物に囲まれた瀟洒な中庭に導かれる。

旧市街の核を成す中欧市場広場は、欧州最大級（200m×200m）の広場。レストラン・カフェなどが並び、いつも住民・観光客などで賑わっている。広場中央には、ルネサンス様式の織物会館（14世紀築造）があり、現存する世界最古のショッピング・モールとか！今は、土産物店・ギャラリーなどに転用されている。

この中央市場広場に東面する聖マリア教会は、1222年築造のゴシック様式。内部に欧州最大の豪華な木造聖壇や美しいステンドグラスなどがあり、敬虔な信者が祈る光景に自ずと厳肅にならざるを得ない。また、教会正面の天を突く2本（81m, 69m）の塔は古都・クラクフの象徴であり、塔上でのラッパ吹奏は、今ではクラクフ観光上格好の見世物なのである。

13世紀に西進したタタール（蒙古）民族がポーランド王国の都・クラクフを侵攻する。その際早く敵の襲来に気付いた塔上のラッパ手が、窓際で住民に危急を知らせるラッパを吹き鳴らす。しかし、強弓を誇るタタール兵が即座に喉を射貫き、彼は吹き終えることなく絶命する！史上空前の版図を成し得た、あの「モンゴル帝国の偉業」が偲ばれる痛ましい逸話なのである。

21世紀の今なお、毎時報を告げるラッパの音色が順繰りに四方の窓からこの中世広場に鳴り響く。しかも、往時のラッパ手を悼むかのように、旋律は唐突に途切れるのである。この哀愁の籠ったラッパの音色に、ポーランドという国が迎ってきた壮絶な民族の歴史が暗示されているかのようだ。



悲話を秘めたラッパの旋律 “聖マリア教会”

ヤギエウォ大学（1364年創立）は、中欧ではカレル大学（プラハ）に次ぐ古い伝統・格式を誇り、「地動説」を唱えたコペルニクスや、その450年後の1992年にこの「地動説」を認めたヨハネ・パウロ2世（前ローマ教皇）も此處で学ぶ。同一民族・同窓という誼で、ヨハネ・パウロ2世はコペルニクス「地動説」を認めたのであろうか？また、今後、キリスト（一神）教がダーウィン「進化論」を受入れることはあり得るだろうか？

第2次世界大戦末期、ドイツ占領軍への一斉蜂起で20万人以上の市民が犠牲になり、都市そのものが破壊され尽くされた首都・ワルシャワと対照的に、クラクフ市域はドイツ軍司令部があったにも拘らず、奇跡的に戦禍を免れ、今なお中世の佇まいを残している。ワルシャワは東京に、クラクフは京都にも例えられようか？

しかし、古来多くのユダヤ人が居住するクラクフは、町の破壊こそ免れたがナチス・ドイツ占領下で想像を絶する苦難に見舞われるのである。

ヴァヴェル城南東のカジミエーシュ地区は、映画「シンドラーのリスト（1993年）」ユダヤ人街（ゲットー）で知られる。また、クラクフ近郊の小さな町・オシフィエンチムに、ナチス・ドイツによるあの忌まわしい大虐殺「アウシュヴィッツ強制収容所」があったのである。現在この跡地は、2km離れたビルケナウ（第2収容所）共々“アウシュヴィッツ博物館”として一般公開されている。この「強制収容所」で行われたナチス・ドイツによる究極の罪過は、『夜と霧』などに詳しく記されている。

クラクフ旧市街観光の後は、かつて人類が冒した比類なき負の世界遺産“アウシュヴィッツ博物館”へ肅として向かうのであった。

ARBIET MACHT FREI (働けば自由になる) —「アウシュヴィッツ」見聞録(2)—

牧 彰

古都・クラクフから、バスで凡そ1時間半、「アウシュヴィッツ博物館」のあるポーランド南部の小さな町・オシフィエンチム(アウシュヴィッツ)へ向かう。

※アウシュヴィッツとは、ナチス占領後のドイツ語地名。

到着後、直ぐにオシフィエンチム駅前食堂で昼食。食後は、単独で駅探索。駅舎・歩廊・軌道などは、往時と変わらないとか! 欧州各国から列車に積込まれてきたユダヤ人たちは、この軌道を通って強制収容所に送られたのである。ふと、アンネ・フランク(『アンネの日記』)の幼くも憂いの籠った眼差しが脳裏を過ぎる。アンネは、此処からビルケナウを経て、ドイツ北部のベルゲン・ベルゼンでその短い生涯を閉じるのである。

かつて人類が犯した最大の過ちの一つが、ナチス・ドイツが、国策としてユダヤ人を排除しようとして大量虐殺を行った場所「アウシュヴィッツ強制収容所」ではないだろうか?

往時の絶滅・強制施設は、アウシュヴィッツ・ビルケナウ・モノヴィツの三大基幹収容所と40ヶ所以上の衛星収容所からなり、現在は第1収容所(アウシュヴィッツ)と第2収容所(ビルケナウ)が「博物館」として公開されている。1940年から1945年までの5年間に、此處で150万人もの人命が奪われたのである。

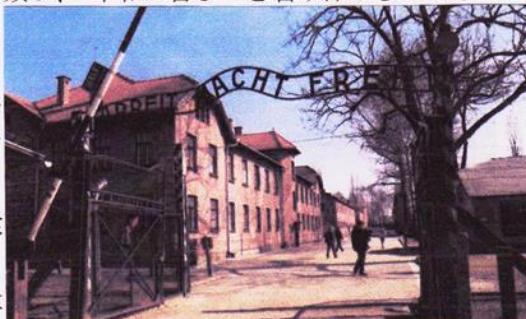
「アウシュヴィッツ博物館」には、ドイツ・ポーランドに限らず、世界中から多くの人々が訪れている。異国籍の大型観光バスが、駐車場に隙間なく並んでいる。昼下りの館内は、欧洲人の団体でかなり混雑している。

なかたにけし 中谷剛さんは、「アウシュヴィッツ博物館」で唯一の日本人案内人。学生時代に初めてポーランドを旅し、社会人になってからポーランドに移住する。1997年に、難関の試験に合格して「アウシュヴィッツ博物館」公式案内人となる。以降、この歴史的“大虐殺”の実体を、後世に伝える役割を演じ続けている。

中谷さんに従って、厳かに旧収容所内へ導かれる。何ら説明もなく連れられて、此處で人生の終焉を迎えた罪なき囚人たちの“在りし日の光景”がふと瞼に浮かぶ。周囲は高圧電流が流れている二重の有刺鉄線檻に囲われ、解放前は常時1万5千人ほどが収容されていたとか!

やがて、「ARBIET MACHT FREI (働けば自由になる)」の看板が掲げられた第1収容所正門に至る。ARBIETのBの文字が逆さまに掲げられていて、「作業者のせめてもの虚しい抵抗」として知られている。この門を潜って無事生還できる私たちは、何たる果報者! 一頃り、“平和の喜び”を噛み締めるのであった。

檻内には半切妻煉瓦造2階建が20数棟整然と並んでいて、赤い壁と生茂った並木(プラタナス)の対比が美しく、恰も大学構内のような情景である。中谷さんの的を射た説明がなければ、外観からは人類が犯した究極の大虐殺現場とはとても思えない。成長し過ぎた樹木は安全のために一部伐採され、新たに苗木を植えて往時の“原風景”を再現している。漆喰塗りの外壁は、経年による剥離に任せて煉瓦を晒している。収容者が強制労働で積み重ねた無機質の煉瓦の壁が、今では温もりある手作りの風合いを醸し出している。



生きて戻れぬ地獄の第1収容所正門(アウシュヴィッツ)

政治犯・脱走者などは、“死の壁”と呼ばれる銃殺場で刑が日常的に執行されていて、聞える銃声に怯えさせられ続けた囚人たちの心境は、如何ばかりだったろうか!

また、死体焼却炉に隣接して“ガス室”が保存されている。このさほど広くない部屋にシャワーを浴びるという名目で数百人が裸で一同に押込められ、天井から噴霧する殺虫剤・チクロンBで大量殺戮される。そして、死体から金歯・指輪を抜いて流れ作業で焼かれたのである。しかも、その作業隊は選抜された囚人自身であり、同じユダヤ人の収容者たちが同胞の虐殺を手伝わされた挙句にいざれば殺されて、別の囚人と入り替えられる仕組みなのである。

収容棟の一部は、展示室になっている。山積みの女の毛髪・眼鏡・義足や、廊下に展示されている囚人の生前写真などがあり、予め覚悟していたような残酷で凄惨な展示品は極めて少なかった。しかし、「“大量殺戮”的現場にいるというこの臨場感」だけでも、思わず背筋に戦慄を覚えさせられるのである。決して繰り返してはならない過ち、これこそ、“負の世界遺産「アウシュヴィッツ博物館」”が担う人類共通の真価というべきであろうか!

ビルケナウ（第2強制収容所）の夕照 —「アウシュヴィッツ」見聞録（3）—

牧 彰

「アウシュヴィッツ博物館」見学の後半は、第1収容所の北西凡そ3kmにある第2収容所（ビルケナウ）へ！第1収容所はユダヤ人の他にポーランド人政治犯・ソ連軍捕虜や同性愛者・障害者などの社会的少数者を収容する施設であり、ホロコースト（ユダヤ人絶滅）の主要な舞台は、この第2収容所なのである。

“死の門”は、中央に監視塔を持つ象徴的赤煉瓦建築。映画「シンドラーのリスト」でもお馴染みのこの光景！監視塔の真下に列車の引込線入口がぽっかりと空いている。「此処から入ると、出口は煙突の煙だけ！」といわれていた“死の門”を潜って、140haもある広大な収容所へ！「東欧に移住させる」と欺かれ、全欧洲から貨物車両で運ばれたユダヤ人たちの“人生の終着駅”に、先ずは“合掌”！

ビルケナウには、第1収容所の7倍の広さの敷地に、当時300棟以上の建物が建ち並んでいて、常時10万人が収容されていたとある。人が重なって寝た3段ベッド付宿泊棟や、床に穴があるだけのトイレ棟などに案内される。ビルケナウの収容棟は、殆んど隙間風に無防備な木造簡易建築なので、冬季の厳しさは想像を絶する。また、施設の大半は解放直前に証拠隠滅を図るために破壊されたので、展示棟の一部は復元による。従って、此処の遺留品などは、第1収容所に一括して展示されているのである。

此処では、過酷な強制労働に適さない女性・子供・老人・病人などは、到着直後に軍医が選別して即刻ガス室送りとなる。また、例え幸運にも労働力（凡そ25%）として選ばれても、囚人たちは厳しい労働・懲罰などで淘汰される宿命にあり、ナチス・ドイツの“ユダヤ人絶滅方針”により、生還できる希望は皆無とか！

過酷な労働を強いられ、家畜小屋の如き劣悪な環境で寒さ・飢えに耐え切れず、多くの囚人たちは3～4カ月で死に至るのである。しかも、収容者の食事の世話から没収財産選別、ガス室での処置から死体焼却までの一切合切は、同胞の特命作業員が行い、ナチス親衛隊はこの屠殺現場を直視せずに済む仕組みになっている。

中谷さんの後について、一面銀世界の広大な第2収容所内をそぞろ歩く。此処で特命作業員として職務に従事し、奇跡的に生還したユダヤ人語り部から、中谷さんは生々しい体験談を直に聞かされていること。戦後生まれで外国人（しかも日本人）案内人・中谷 剛さんが、道理で「説得力に長けている」訳である。これには納得！

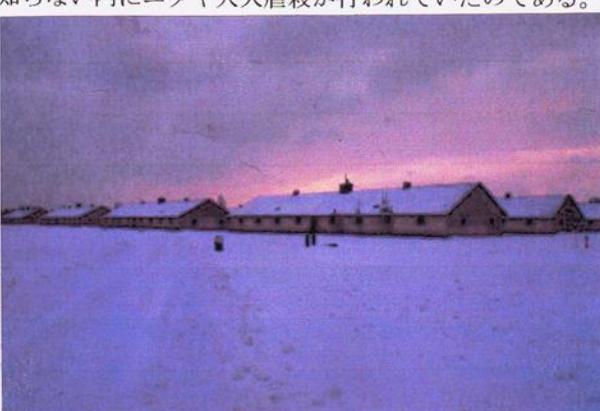
中谷 剛さんの解説は、被処刑者側の恐怖心は元より、処刑者側の心情などにも言及し、如何にして斯くも人間性を喪失し得るのか？このような機械人間を産み出した体制の恐ろしさなど、多角的観察眼と鋭い洞察力に裏付けられていて感銘を受ける。今更ながら、現代日本人の“平和呆け”を認識させられるのであった。

此処での惨劇^{カタストロフィ}を説明しながら、中谷さんは静かに語りかける。「何故、こんなことが起きたか？皆さんに考えて戴きたい！そして、日本の戦争を知らない若い世代に、是非伝えて欲しい！」と。

第一次世界大戦敗戦で巨額賠償金を要求されていたドイツは、世界大恐慌により危機的状況に追い込まれる。失業率も高まり失望した国民の期待を一身に背負うのが、民主的選挙による“ヒトラー政権”！でも、国民の大多数がヒトラーを支持した訳ではなかった。しかし、彼に疑惑を感じた国民は少なく、その大半は政治に無関心！そんな状況下で、いつの間にか国民は戦争に駆立てられ、知らない内にユダヤ人大虐殺^{ホロコースト}が行われていたのである。その要因は、偏に“政治への無関心”に起因するとか！

ところで、当時のドイツと現代日本のバブル崩壊以降の政治・経済などは、きわめて似ているのでは？ そういえば、先の衆議院選も戦後最低の投票率でしたね！

ユダヤ人精神科医ヴィクトール・フランクルは、過酷な環境の中で囚人たちが「何に絶望したか、何に希望を見出したか」を『夜と霧』に克明に記す。収容所での体験を通じて“生きる意味”を学び取ろうと決め、“人間の真理”を冷静に分析する。フランクルは考える。「心の支えや生きる目的を持つことが、生き延びるための唯一の道である」と。そして、彼自身も奇跡的生還を果たすのである。



一面銀世界の広大な第2収容所（ビルケナウ）

それにしても、ビルケナウ（第2収容所）の広大な雪原の彼方に落ちる“日輪の美しさ”は、正しく感動もの！生還者は、「この大自然の驚異“夕照”を美しいと思う心が、生き抜くための大きな励みに！」と厳かに語っている。

「人間も、また自然の分身」であり、私たちは、「自然に産まれ、自然に生き、自然に帰る」存在なのです。

ホロコーストを次世代に語り伝える！

—「アウシュヴィッツ」見聞録(4)—

牧 彰

老いたる人よ、汝らこれを聴け！すべてこの地に住む者汝ら、耳を傾けよ！
汝らの世、あるいは汝らの先祖の世に、斯くの如きこと起りしや？
汝らこれを子に語り、子はこれをその子に語り、
その子これを後の代に語り伝えよ！

(旧約聖書 ヨエル書第1章2-3節)

人類の過ちを記憶するための“世界遺産”がある。第2次世界大戦時にナチス・ドイツがユダヤ人たち凡そ150万人を大量虐殺した絶滅・強制収容所「アウシュヴィッツ」の他に、14万人もの生命を一瞬にして奪い、核兵器の悲惨さを伝える「広島平和記念碑（原爆ドーム）」、数百万人のアフリカ人を南北アメリカ大陸に送り出した奴隸貿易の中継地「ゴレ島」、人種隔離政策に反対の政治犯を収容した「ロベン島」など。最近の登録例としては、冷戦時代に米国が核実験を繰り返した「ビキニ環礁（2010年）」がある。

“世界遺産”的活動の中核を成す“ユネスコ憲章”的前文に、「戦争は人の心の中で生まれるのであるから、人の心の中に平和の砦を築かねばならない」とある。“負の世界遺産”は、恒久平和や人道的観点などから、人間の＜負＞の行為を永遠に記憶に留め、同じ過ちを二度と繰り返さないために、未来に語り伝える伝言であり使命を担っている。

「広島平和記念碑（1996年）」は、核兵器による惨状を今日に伝える世界で唯一の遺蹟であり、“核兵器廃絶”と平和の大切さを希求する人類共通の“歴史の証人”として評価される。しかし、“世界遺産”登録に当たり、米国は「戦争関連施設は、遺産リストに含めるべきでない」として不支持を表明し、中国は「第2次世界大戦での日本の戦争責任」に触れて賛否を保留している。

米国は、ヒロシマ・ナガサキへの原爆投下を戦争早期終結・被害縮小化や植民地早期解放を理由に正当化し、核抑止論に基づいて核兵器先制使用戦略を頑なに取り続けてきた。しかし、2009年4月5日、オバマ大統領は、米国が核兵器を使用した唯一の国家としての道義的責任に触れ、「核兵器廃絶」のために、米国が指導的役割を果たす」と宣言する。オバマ演説は、米国が今世紀の世界戦略を転換しつつあることを意味している。この＜核兵器廃絶宣言＞により、オバマ大統領は“ノーベル平和賞”を受賞するのである。

「原爆ドーム（世界遺産）」の存在が米国世論を“核兵器廃絶”へ一步前進させた糸口か？は不間に付すが、オバマ演説の翌年に「ビキニ環礁」が“世界遺産”追加登録されたこともあり、核兵器使用の犯罪性や非人道性を再認識し、“核兵器廃絶”が今後世界的潮流となることに異論はなかろう。そこで、提案！日本も環境共生立国・ドイツを大いに見習い、堅実で“安全なエネルギー政策”を速やかに立案し、「フクシマ（東電福島第1原発跡）」を「原爆ドーム」に次ぐ本邦第2番目の“負の世界遺産”登録に向け邁進しようではないか！

「アウシュヴィッツ博物館」は、人間の犯した罪を静かに、そして強烈に問いかけてくる。かつて、日本が戦争を仕掛けたことを改めて考えさせられる。ナチスの非道に留まらず、想いは戦争そのもの、何よりも人間そのものに及ぶのである。＜過ち＞を再び繰り返さないために、まずは歴史を正しく認識することこそが肝要であろう！

ドイツと日本の共通点が多い。共に戦争に負け、目覚ましい経済成長を遂げた。ものづくり先進国といわれる。出生率は低く、高齢化が急速に進んでいる。しかし、日本とドイツの根本的な違いは、“過去との対話”なのでは！ドイツは過去を真摯に自己批判し、そして克服したが、日本は果たしてどうなのだろうか？

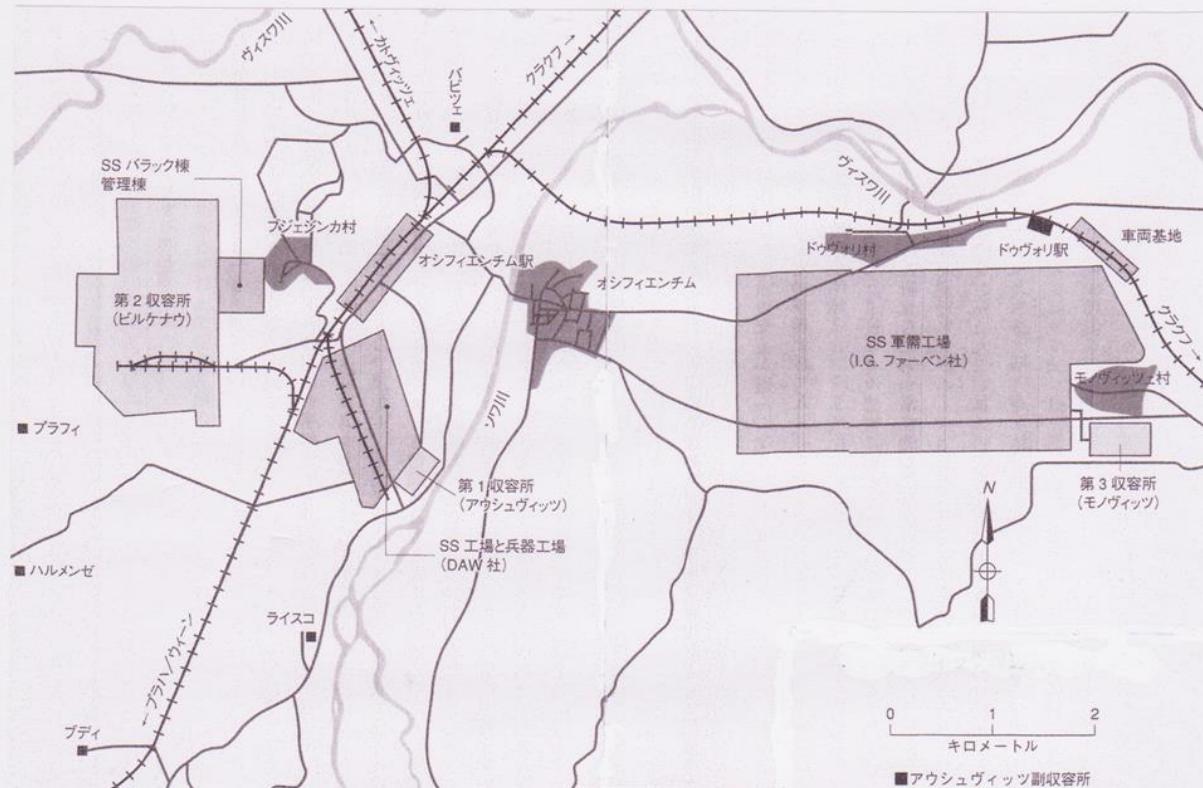
戦後日本の状況を難しくしているのは、中国・韓国など近隣諸国への“自己批判精神”に欠けていることがある。これは、先の“アジア・太平洋戦争”で、日本が「米国には負けたが、中国に負けたとは思っていない」ことによる。

近年、欧州の中でドイツの存在感が増しつつある。各国が経済低迷に喘ぐのを尻目に、ドイツは早々と世界経済危機への対応を仕切り、ベルリンは「EU（欧州連合）の首都」とも称されている。今日のドイツの繁栄は、偏に戦後の対応にあるといえないだろうか？

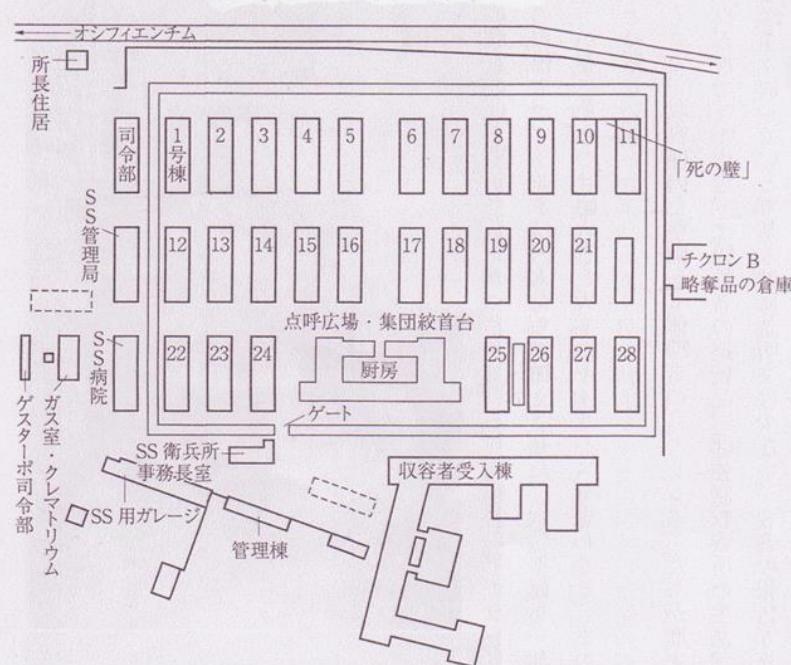
第2次世界大戦敗戦国として、とかく比べられることの多い日本とドイツ。日本がアジアの中で真にその独自性を發揮するために、現代ドイツから学ぶべきことは多いのではないだろうか！



旅路の果ての終着駅“死の門（ビルケナウ）”



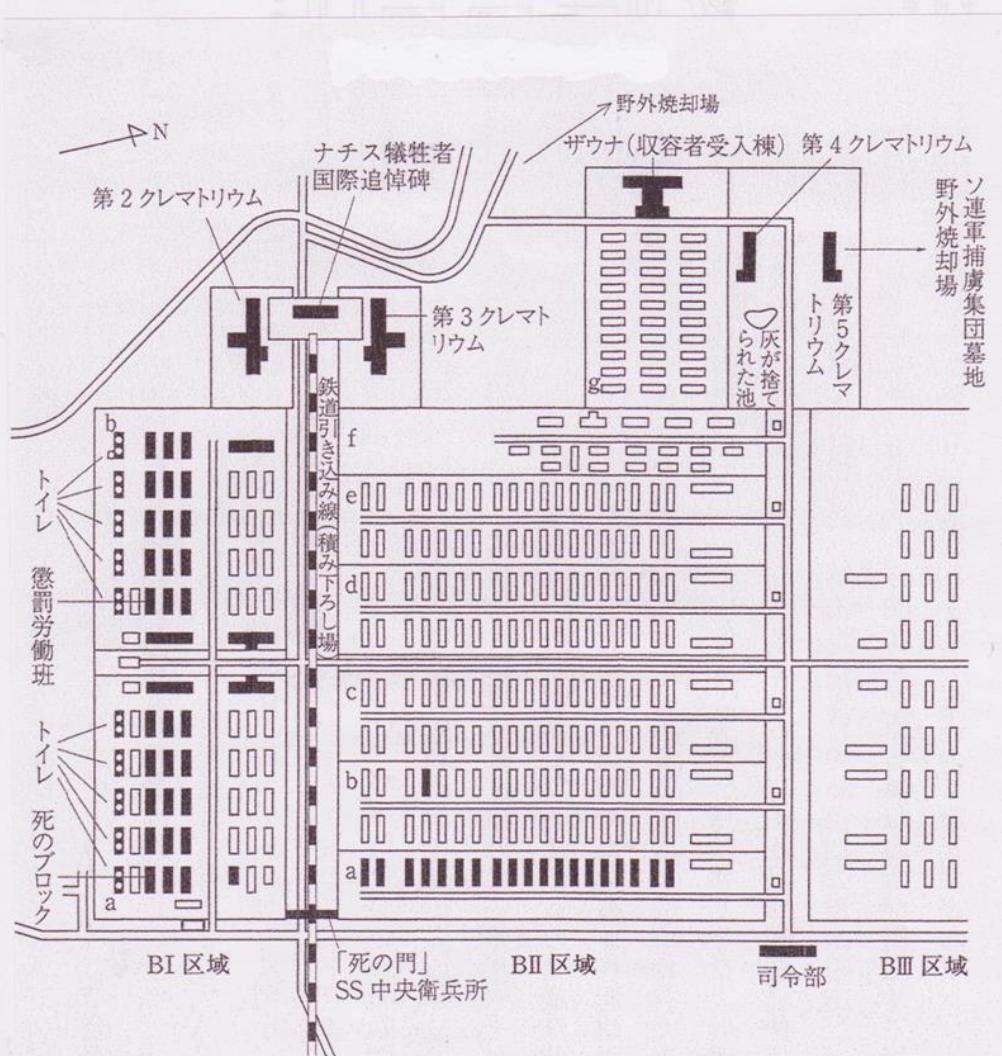
「アウシュヴィッツ」周辺図



〈歴史展示室〉

- 4 (号棟) 虐殺
- 5 犠牲者の遺留品
- 6 強制収容所の生活
- 7 収容棟内の様子
- 11 抵抗活動
- 〈各国の展示〉
- 13 ロマ
- 15 ポーランド
- 16 スロバキア/チェコ
- 17 ユーゴスラヴィア/オーストリア
- 18 ハンガリー
- 20 フランス/ベルギー
- 21 オランダ/イタリア
- 27 ユダヤ民
- 〈その他の施設〉
- 10 断種実験室
- 19, 20, 21, 28 収容所内病院

第1収容所 (アウシュヴィッツ)



BI-a 女性収容所

BII-b 男性収容所(1943年以降女性収容所)

BII-a 隔離所

BII-b テレジンのユダヤ民家族用収容所

BII-c ハンガリーのユダヤ民収容所

BII-d 男性収容所

BII-e 「ジプシー」家族用収容所

BII-f 囚人用病院

BII-g 犠牲者から奪った遺品の倉庫

(通称カナダ)

■ 当時の状態で残るバラック

□ 現存しない施設

第2収容所（ビルケナウ）



■ 絶滅収容所跡

ボーランドに残るナチス・ドイツ絶滅収容所跡